

- 38) 上掲書13), S. 179—180
- 39) Karl Jaspers: Nietzsche—Einführung in das Verständnis seines Philosophierens
(Walter de Gruyter & CO., 1950), S. 403
- 40) 上掲書2), Bd. II, S. 745

- 14) 上掲書2), Bd. III, S. 553参照。
- 15) ニーチェは、『善悪の彼岸』（アフォリズム番号278）の中に次のように書いている。「ひとつ与えて欲しいもの、私の求めるもの——（中略）それは、もうひとつの仮面！ 第二の仮面だ！」
- 16) 上掲書2), Bd. I, S. 1174
- 17) 上掲書2), Bd. II, S. 603—604
- 18) 上掲書13) においてベルトラムは、「仮面の必然性の意識が初めて露骨な明白さをもって現われるのは、『人間的なあまりに人間的な』の時期においてである」としているが、はたしてそうか。拙論において示されるとおり、『悲劇の誕生』においてすでに、仮面についての理念が芽ばえていると考えられるのではないのか。
- 19) 上掲書2), Bd. I, S. 30
- 20) 上掲書2), Bd. I, S. 30
- 21) 上掲書2), Bd. I, S. 1191
- 22) 上掲書2), Bd. II, S. 1061
- 23) ベーダ・アレマンもその著『イロニーと文学』のなかで、「(ニーチェの思考のなかには)ギリシア人たちの高度な俳優性と、表面をめざす芸術意志から出た仮面の肯定」が認められることを指摘している。vgl. Beda Allemann: Ironie und Dichtung (Neske, 1969), S. 107
- 24) 上掲書2), Bd. II, S. 87
- 25) 上掲書13), S. 189
- 26) 上掲書2), Bd. III, S. 497
- 27) 上掲書2), Bd. II, S. 599
- 28) 上掲書2), Bd. III, S. 314
- 29) 上掲書2), Bd. III, S. 769
- 30) 上掲書2), Bd. II, S. 754
- 31) ニーチェは『華やぐ智慧』のなかで、ヴィジョンの前触れについて次のように書いている。「彼の作品は、彼がもともと言い表わそうとしたこと、見ようと願ったことを、決して残らず表現しはしない。彼はあるヴィジョンの訪れる前触れを楽しんだとしても、ヴィジョンそのものは少しも味わいはしなかったように見える、——だが、このヴィジョンへの異常な熱望が彼の心の中に残留して、そこから彼は願望や渴望に憑かれたかのように、異常な雄弁を取り出してくる。」
- 32) 上掲書2), Bd. II, S. 751
- 33) 『人間的なあまりに人間的な』のなかに次のような一節がみられる。「詩人の思想。——ほんとうの詩人たちにあっては、ほんとうの思想はすべて、エジプト婦人のようにヴェールをかけて歩きまわる。そして思想の奥深く眼だけが自由にヴェール越しにのぞいている。」
- 34) 上掲書2), Bd. II, S. 751
- 35) 上掲書2), Bd. II, S. 752
- 36) マキー著、後藤信幸訳『ルー・ザロメ——ニーチェ・リルケ・フロイトをめぐる』（『ルー・ザロメ著作集別巻』、以文社、1974）、76頁
- 37) 「だから私たちは、ニーチェの精神発展のいずれの時期においても、ニーチェが何らかの様式や形式で仮面をかぶっているのを見い出す。」（ルー・ザロメ著、原佑訳『ニーチェ・人と作品』、以文社、1974。27頁）

これが——真理の求婚者だって？
いな，阿呆にすぎぬ！ 詩人にすぎぬ！

(『ツァラトゥストラ』第4部第14節)

「……真実として作用するのは，仮面だけである。ただ幻影としての仮面においてのみ，いっさいの生は生へと誘惑する。(中略) 独立的になった精神，つまり，かぎりない幻滅の荒野のなかで地平線の幻覚を喘ぎ求める者にとってはじめて，仮面は不可避的であり，必然であるということが，単なる認識から体験となる。」³⁸⁾ (ベルトラム)。ここで言う〈かぎりない幻滅の荒野〉が先に述べた絶対的ニヒリズムの世界であることは間違いない。ツァラトゥストラの敢行にもみられるように，そのニヒリズムの超克を希求する者には，幻影を幻影として見とどけるべく，周到に仮面が用意されなければならない。なぜなら，K. ヤスパースの言うように，「真であるものが直接的でないとするならば，仮面こそは現存在に所属する」からである。仮面はその意味でまさに，「存在を仮象に追いやることによって……存在を逆説的に把握するところの，現存在の可能性」³⁹⁾ にほかならないであろう。だからこそ，あらゆる場合に〈仮面に対する畏敬の念〉は，ニーチェにとって，〈すぐれて洗練された人間性〉に属するのである⁴⁰⁾。

注

- 1) Eugen Fink: Nietzsches Philosophie (W. Kohlhammer Verlag, 1960), S. 10
- 2) Friedrich Nietzsche. Werke in drei Bänden, Herausgegeben von K. Schlechta (Carl Hanser Verlag, 1960), II, S. 639
- 3) 上掲書1), S. 14
- 4) Walter Kaufmann: Nietzsches Philosophie der Masken (in: Nietzsche-Studien. Internationales Jahrbuch für die Nietzsche-Forschung, Bd. 10/11, Walter de Gruyter, 1982), S. 120
- 5) 上掲書2), Bd. III, S. 553
- 6) 上掲書2), Bd. III, S. 578
- 7) 上掲書2), Bd. III, S. 445
- 8) 上掲書2), Bd. II, S. 744
- 9) 上掲書2), Bd. II, S. 290
- 10) 上掲書2), Bd. I, S. 944
- 11) 上掲書2), Bd. II, S. 49
- 12) 上掲書2), Bd. II, S. 744
- 13) Ernst Bertram: Nietzsche — Versuch einer Mythologie — (H. Bouvier u. CO. Verlag, 1965), S. 180

用意されるべきものとなる。生命と事実の無限の再生は、おそらくニーチェの思想の根幹をなしているに違いない。と同時に、仮面の精神もまた、絶えず新たな自己を再生し続ける自己変貌の欲求の蝟である。それは〈仮象〉を实在性のもとへ引きずり込む〈力への意志〉、ないしは、創造的な仮構的精神とも言い得るものである。I. S. マキーは、この点に関連して次のような論述をしている。つまり、ニーチェにおける仮面の思想は、「ニーチェの哲学の特徴となっている精神的変転の胚種を隠している。変貌を願うニーチェの異常な要求は、自己の知的感動を絶えず新たにせんとする飽くことのない欲望が要因となっていた。ニーチェの思想におけるこうした複雑な変貌は、彼が生涯のディオニュソス劇で自ら演じたさまざまな〈仮面〉を表わしているのだ。」³⁶⁾

マキーの指摘にも、またルー・ザロメの指摘にも見られるとおり³⁷⁾、確かにニーチェは、生涯を通じて自らの仮面劇を演じつくしたと言って過言ではない。〈畜群〉を仕立てあげて隷属文化を告発し、キリスト教文化に対して壮大な挑戦を試み、ソクラテスやワーグナーをあえて自らのアンティテーゼとして設定することによって、すべからく徹底した自己解剖のメスを振るった。それは、言わば自己磔刑にも比すべき、〈自己超克〉の実践以外の何ものでもないであろう。そう言えばニーチェには、〈自己自身に対して生体解剖を施してみるがよい！〉（『道徳の系譜』）という自戒の言葉がある。自己を仮構として、仮面として見立てるとき、当然の結果としてわれわれは、自己を〈おのれ自らにとっても仮面であり、おのれ自らの獲物となる者〉として認識することを強いられるであろう。

ニーチェは、虚偽や仮象や仮面といった局面に大きく傾きながら、しかし一方で、この〈認識の倫理家〉は「〈もの〉を深く、複雑に、根本的に考察しようと欲する認識者のあの崇高な傾向が反逆する」のを確認しつつ、虚構する（dichten）ことと認識する（erkennen）こととのあいだで、わが身をもてあましながら次のような憂愁の歌を口ずさむのである。

いな、ひとりの詩人にすぎぬ！
一匹の獣、狡猾で、獲物を求めて忍び歩き、
嘘をつかざるを得ず、
意識して、故意に嘘をつかざるを得ぬ獣だ。
貧欲に獲物を求め、
色とりどりの仮面をつけ、
自分が自分に対して仮面であり、
おのれ自らの獲物となる者――

言う。「思想以前の状態、いまだ生まれ出ない思想の蝟集、未来の思想の約束、神の創造以前の状態の世界、——混沌の再発……混沌が予感させるのである……。」(『ワーグナーの場合』)。ニーチェのさまざまな哲学的思念もまた、このような混沌とした原初的な思想の蝟集のうちから生い育っている。「舞踏する星を産み得るためには、ひとはおのれの内部になお混沌を持たなければならない」(『ツァラトゥストラ』)のである。内部におけるそのようなディオニュソス的カオスを包みこむヴェールとして、ニーチェは〈皮膚〉や〈表皮性〉という言葉を用いているが、おそらく〈仮面〉という概念もこれらと同次元のうちにあるだろう。

ニーチェはあるとき、「ひとは、おのれの内に秘めたものを隠匿するためにこそ、本を書くのではないのか？」³⁹⁾と自らに問いかけている。著述する者が、意図して〈思想以前の状態、いまだ生まれ出ない思想の蝟集〉の段階に踏み留まるかぎり、その思想はヴェールに包みこまれたものとして顕現する³⁹⁾。しかもそのヴェールは、必然的に招来されるのであり、ニーチェが言うように、あらゆる深い精神のまわりには絶えず仮面が生れ育つ。「隠遁者の著作のなかからは、いつも何かしら荒野のこだまのようなものが、孤独に脅えてあたりを見まわす気配と、囁きのようなものが聞きとれる。彼のこよなく力強い言葉から、彼の叫びからすらも、ある種の新しい危険な沈黙が、秘密を守る沈黙が伝わってくる。」³⁹⁾ ニーチェが〈隠遁者〉という言葉に託して、このように自己を語る時、われわれは、ニーチェの〈叫び〉と〈沈黙〉のあいだにあるものを、物言わぬ力で圧倒的に訴えかけてくる仮面の形象のもとに把えかえすことができるであろう。文字通り、ニーチェは叫びと沈黙の思想家である。光彩陸離たるニーチェの言辞の背後には、この詩人哲学者の深い沈黙が眠っており、それが場合場合に応じて、自己隠蔽や自己演出の仕儀へと結びつく。「あらゆる思想家は、誤解されることよりも、むしろ理解されることを恐れる」³⁹⁾、というニーチェの逆説的なイロニーも、そのような観点から理解される必要があるであろう。

すべてのものは〈流れのうちにある〉、すべてのものは転位してやまない〈虚偽〉として、すなわち〈仮象〉としてのみ存在している。「すべての真なる存在に対して、われわれは、表面的に関与しているだけである。われわれは、象徴や形象の言葉を語っているだけである。」(遺稿『哲学者に関する著作のための準備草案』)。そのような局面にあるかぎり、ひとは自己破壊と自己再生を際限なく繰り返すツァラトゥストラの運命を引き受けることになる。〈生成の世界が存在の世界へ極限的に接近する〉瞬間は、まさしく自己の内部において

があるということは、道徳的な先入観にほかならない。(中略)遠近法的な評価と仮象性とに基づかないかぎり、生というものはまったく存立し得ないであろう。」²⁷⁾ ニーチェによれば、およそ〈認識〉という言葉が意味を持つかぎりにおいては、生きた世界の全体性は〈認識〉され得るものである。しかし、世界はまた別様にも解釈されうるのであり、それはおのれの背後にいかなる意味をも持たずはならず、かえって無数の意味を持っている。——ニーチェがすべての哲学をひとつの〈前景の哲学〉と呼ぶゆえんであり、すべての見解をひとつの〈隠れ場〉と呼ぶゆえんである。

総じてニーチェには、〈人間の認識全体の真理性を問いただそうとする〉(E.フィンク)姿勢が顕著であるが、そのニーチェが、K.シュレヒタの言う〈認識というもののニヒリスティッシュな根本性格〉を見とどけていたことは、疑いを入れない。認識に対する極度の懐疑のなかで、ニーチェは一切の視点の固着化や、そしてまた一切の真理所有をあえて峻拒する。なぜなら、「真理とは幻影なのであって、ただひとがそれが幻影であることを忘れてしまったような幻影である」²⁸⁾ からだ。ニーチェにとっては、言葉がひとつの仮面であるのと同様に、真理もまた一箇の仮面として把握されている。

「認識されうるものは、すべて仮象なのである。」ニーチェはそのように述べ、真なるものにたとえどのような価値が帰せられようとも、仮象への意志のほうに、生にとってのより根本的な意味があることを明らかにする。「〈仮象性〉は、それじたい実在性に属している。それは、実在性の一存在形式なのである」²⁹⁾、とニーチェが言い切るとき、もはやわれわれは、仮象と実在の二重性に包みこまれた〈仮面〉の概念を眼の前にしていることになるだろう。ニーチェにおける仮面の理念は、実存の深層と触れ合う仮象の一局面、ないしはそれへの意志の一形態として呈示されていると言えないだろうか。

3. 仮構的精神としての仮面

ニーチェの著述は、周知のように、多くの矛盾や誇張や神秘的飛躍に満ちている。ニーチェの自己評価の言葉に従えば、「彼の洩らす一語、彼の投ずる一瞥たりとも、誘惑の企てや底意を秘めていないものはない。」³⁰⁾ いな、それが誘惑であるのか、底意であるのかも、必ずしも定かではない。実のところ、ニーチェの諸々の思想は、いみじくもニーチェ自身が言うように、〈何ものかをほのめかしてはいるが、さらにそれ以上になお多くを秘匿している皮膚〉にも似ている。もしかするとニーチェは、自らの思想を、それが水平線から立ち昇る直前の曙光の輝きのうちに、予覚的に把握したのかもしれない³¹⁾。ニーチェは

チェによって、いわば仮象の次元、仮面の次元で把えられた。ニーチェは、アポロ的な衝動とディオニュソス的な衝動に言及して独自の芸術論を展開したが、その試論の主眼は、ギリシア文化（ないしは文化一般）におけるディオニュソス的な仮面性へのアプローチにあったと考えることも不可能ではない。『華やぐ智慧』の一節のなかでニーチェは、次のような確認をしている。「古代の生活については、仮面に対する喜び、一切の仮面的なものの良心を理解しないとしたら、いったい何を理解し得よう！ここに古代精神の浴みと休息があるのだ。」²⁴⁾ ちなみに、E. ベルトラムはその著『ニーチェ——ある神話の試み——』（1929）において、ニーチェにとって仮面は一切の南方的・ギリシア的な本質の象徴である、という見解を示している²⁵⁾。

さて、『悲劇の誕生』においては主に芸術論として仮象の問題が論じられたが、その前後に書かれたいくつかの論文においてニーチェは、認識論や存在論の観点からもこの仮象の問題に迫っている。特に、言葉や認識の本質に決定的な意味を持っているものとして、ニーチェは〈仮象〉や〈意志〉をとりあげ、これらに対して大きな比重を置いている。

ニーチェによれば、言葉というものは元来、〈実在の適正なる表現〉とはなりえず、むしろあらゆる個別的なもの・一回限りのものを等閑に付し、〈もの〉の全体的性格に対してよそよそしいばかりか、そのディテールを覆い隠しもする。言葉はまさにその意味で、ひとつの〈偏見〉であり、言葉はすでにそれじたいが一箇の〈仮面〉である、とニーチェは断じてはばからない。言葉の問題を論じる傍らで、つねにニーチェは認識のあり方を問い続け、特に不毛な認識の典型として〈ソクラテス主義〉を批判の矢面に立てた。〈意志から自由な純粹認識〉や〈客観性〉、〈真理〉などを鋭く指弾する一方で、認識の仮構性や存在の仮象性について、果敢にその論拠を道破しようと試みる。純粹認識や絶対的認識の形容矛盾を指摘するニーチェは、いわばその矛盾の内側にある〈嘘〉や〈仮象〉の位相に積極的な意義付けを行うのである。〈道徳外の意味における真と偽〉の問題は、若いニーチェの最大の関心事のひとつであるが、なかでもニーチェがその〈偽〉の局面に大きな傾斜をみせていることは、注目されなければならない。「私たちと何らかの係わり合いを持つこの世界は、ひとつの偽りである。すなわち、いかなる事実でもなく、諸々の観察の貧弱なトータルの上に創作され、丸めこまれたものである。それは、何か生成するものとして——〈真理〉なるものは存在しないがゆえに、決して真理に近づくことはないところの、絶えず転位してやまない虚偽として、いわゆる〈流れのうちにある〉のだ。」²⁶⁾ いやしくも何か崇拜すべきものがあるとすれば、それは〈仮象〉である、ともニーチェは言っている。「もともと、真理が仮象よりも価値

んど認められない。にもかかわらず、ニーチェにおける〈仮面〉の精神の原型が、『悲劇の誕生』を中心とするギリシア古典文化との関わり合いに遡源するであろうことは、以下に述べるところからも明らかである¹⁸⁾。

ニーチェがアッティカ悲劇を引き合いに出しながら、『悲劇の誕生』において説き明したものは、その文化現象のうちにみられる人間の根源的な生への衝動についてであった。ギリシア文化におけるアポロ的明澄さは、あくまで表面的なものにすぎず、本来その背後には、存在に対する震憾的なおののきが隠されていることを、ニーチェは文化発生史的な観点から詳述した。「(紀元前7世紀の悲劇的時代における)ギリシア人は、存在の怖れと驚きを知り尽し、また感じとっていた。およそ生存をまっとうせんがために、ギリシア人はこの怖れと驚きとの前にオリンポスの神々という輝やかなしい夢の産児を立てざるを得なかった。」¹⁹⁾ たとえば、偉大な人間の友プロメテウスのあの秃鷹や、聡明なオイディプスのあの恐ろしい運命、そしてまたオレステスに母殺しを強いるアトレウス族のあの血の呪いなどは、「オリンポスの神々という芸術的な中間世界を通して、ギリシア人に絶えず新たに克服され、ともかくも覆いをかけられ、眼から遠ざけられたのである。」²⁰⁾ (下点筆者)。ギリシア古典文化は、意識的に芸術的なヴェールを創り出すことによって、言い換えれば、〈嘘をつくという能力〉を最大限に発揮することによってはじめて存立し得た、偽装の文化・仮面の文化であった、ということになる。「そこでは仮象と存在との対立が、まったく感じられない」²¹⁾ ということが、この文化の最も顕著な特徴であり、ギリシア人はあえて仮象の世界に踏み留まることによって、そこから逆説的に存在を自己の内へと引きずり込むすべを心得ていた、とニーチェは言いたいのであろう。次の一節は、『華やぐ智慧』の序文と『ニーチェ対ワーグナー』の結びの文に重複して綴られている言葉である。「おお、ギリシア人たち！ 彼らは生きるすべをわきまえていた！ そのためには表面に、髪に、表皮に勇敢に踏み留まり、仮象を崇め、形式と音調と言葉を、そして仮象のオリュンポス全体を信ずる必要がある！ このギリシア人たちは、表面的であった——まさに深さのゆえに。」²²⁾ もしかすると、ギリシア文化に見られるこのような内奥と表面(仮面と言ってもよい)との微妙な弁証法のうちにこそ、ニーチェが仮面の精神を汲み取っていくもともとの素地があったのではあるまいか。

かつてJ. J. ヴィンケルマン(1717—1768)が説いた古代美の理想とされる〈高貴な単純と静かな偉大さ〉(edle Einfalt und stille Größe)。そのような人文主義的なイデーを完全にくつがえすニーチェの古典文化観は、ギリシア人たちの〈俳優性〉や、その文化の背後にみられる〈嘘〉や〈ヴェール〉の要因を抉剔したことに、大きな意義があるだろう²³⁾。ギリシア的晴朗さは、ニー

おける〈距離のパトス〉の反映とみなすことができる。〈魂そのものの内部に絶えず新たな距離を拡大しようとする熱望〉にかられて、限りなく自己をつきくずしてゆく者、それがニーチェの言う〈高級種〉であり、〈深い精神〉であった。「偽装は、最後には自分自身を止揚する」¹⁶⁾ (Die Verstellung hebt sich am Ende selber auf.) というニーチェの言葉が、何よりそれを裏付けている。

偽装という〈プロテウスの巧技〉が、ニーチェによって、〈義務としての偽装〉、〈善意としての偽装〉と呼ばれるのも、まさしくそのような意味合いにおいてである。ニーチェは仮面の哲学を次のような言葉で明らかにした。「すべて深いものは、仮面を愛する。(中略)このような隠された者、本能的に、沈黙と黙秘のために言葉を用い、倦むことなく自己伝達を回避しようとする者は、仮面が自分の代わりに友人たちの心や頭のなかを歩きまわることが欲し、またそれを要求する。そして、かりに彼がそれを欲しないとしても、にもかかわらずそこには自分の仮面があるということについて、——またそうあってよいのだということについて、いつの日にか彼は開眼することだろう。あらゆる深い精神は仮面を必要とする。そればかりでなく、あらゆる深い精神のまわりには、絶えず仮面が生れ育つ。」¹⁷⁾

2. 仮象としての仮面

言うまでもなく、仮面はひとつの表象であり、ひとつの仮象である。自己を超え、万物を超えたこの表象としての仮面は、古来、祭儀における顕現の神として、また、現存と非存在の二重性デュアルそのものとして、宗教儀礼や古代演劇に不可欠のものであった。一方また、仮面という概念が西洋哲学における重要な思考原理としての役割を果たしてきたことも、周知のことである。

ところで、ニーチェが仮面や偽装などについての独自の想念を抱き始めるのは、どの時期からであろうか。また、それはニーチェの根本思想とはどのような係わり合いを示しているのであろうか。ひとまず結論を先取りして言うならば、時期としては恐らく『悲劇の誕生』(1872)の成立時期の頃まで遡ると考えられる。一方、主題の展開という点から言えば、ニーチェが特に固執している仮象の問題や遠近法的な認識論などのうちに、すでに仮面という発想の萌芽が見い出されると考えられる。なるほどニーチェの初期の著述においては、仮面や偽装といった直接的な表現は、むしろまれである。そこでは、古代ギリシア悲劇の上演において着用された〈無恰好な仮面〉に関する言及は散見されるものの、中・後期の作品にみられるような仮面についての多層的な含意はほと

北の思想である。久遠の時間の流れに対し〈無駄だ〉というリフレーションが空しく響き渡っている世界を、そのまま是認するニヒリズムの思想圏である。しかしながら、一方でツァラトウストラは、この絶対的ニヒリズムを超克する契機をもすでに予覚しており、〈永遠回帰〉の思想を打ち出すべき時期を見計っている。無の世界を生きるに値するものへと価値転換することが、ツァラトウストラの最大の課題であるわけであるが、この問題の深刻さにいまだ眼覚めていない多くの〈畜群〉に対して、突然の衝撃を与えることは決して良策ではないだろう。「彼らは、自分たちの優しく甘い、夢想的で昂揚した感情を、いきなり指摘する者に対して、まるで自分の秘めごとをのぞかれでもしたかのように、突然の憎悪を抱く」¹¹⁾ (『華やぐ智慧』) からである。ニーチェが言うように、〈苦悩する者〉、〈犠牲者と言ってしかるべき者〉ツァラトウストラはおそらく、「世の厚かましい同情的な手に触れられることから身を守るために、およそ自己と苦しみを同じくしないすべての者から身を守るために、あらゆる形での偽装を必要とする」¹²⁾ のだ。「しょっちゅう十字架につけられないためには、仮面をつけざるを得ない。誘惑するためにもそうである。」¹³⁾

ニーチェによれば、〈あらゆる時代の弱者や凡庸な者どもの根本傾向〉は、〈より強い者たちを弱体化せしめ、引きずり降ろす〉ことへと向かう。いまかりに、低級種が自らの欲求を形而上学的な価値にまで及ばせるとき、〈全生存は卑俗化され、凡庸化されて〉、ついには存在そのものがニヒリズムの渦中へ深く沈み込んでしまう¹⁴⁾。そのような事態を回避するためにこそ、ツァラトウストラは心ある者に向かって次のように呼びかけた。「隣人よ、同胞よ、わたしは諸君に偽装をしてもらいたい。十分に着飾って、見栄を張り、善人づらをして威厳を保っていて欲しいのだ。——そして、わたし自身も仮装をして諸君のあいだに座っていよう。」(『ツァラトウストラはこう語った』第2部21節)。いずれにせよ、ツァラトウストラの本性には、〈極上のしなやかさと力〉をあわせ持った舞踏性、仮面性が顕著なのである。

さて、この偽装という行為が〈凡庸な者〉に対処するための意図的な手段であったことは否定すべくもないが、しかし同時に、ここで考えておかなければならないことは、自らを偽装するという行為の内側には、自己超克への強い意志が認められる事実である。〈深い精神〉、〈選り抜きの認識者〉は、絶えず自己の他人化をはかり、自分の〈唯一の関知者に復讐〉すべく、第二、第三の自己を必要とする¹⁵⁾。自己破壊と自己再生を無限に繰り返す仮構的な精神こそ、〈偽装〉の第一義的な特性である。ツァラトウストラの教説が、〈あらゆる意味での疎隔を教え、いまだかつてなかった間隙を引き裂く〉思想であったとすれば、大衆との間のその〈距離のパトス〉は、とりもなおさず、自己の内部に

悩し得るかということこそ、その人間の階序を決定すると言ってよい」⁸⁾、と示唆している。))

人間存在について深く苦悩する〈高級種〉は、例外なく絶大な誇負の念と、そして同時に、いかんともしがたい孤絶感・嘔吐感を胸のうちに秘めており、従ってまた、自己表出への衝動と自己隠蔽への衝動をあわせ持っている。いわゆる〈高さの宿命〉を負った者の、大いなる自家撞着である。ところで、超人の告知者ツァラトゥストラは、まさしくそのような〈高級種〉の具体的なイメージとして啓示されているとみて差し支えない。そこで、このツァラトゥストラが〈偽装〉の手立てを体得するにいたるその閱歴についてとりあえず垣間見ておくことは、意味のないことではないだろう。

ツァラトゥストラは、30年間山にこもって思索にふけたすえ、山を降りて〈大衆〉のもとへ足を運んだ。そして、〈人間は自己超克をすべき何物かである〉という、自ら獲得した教説を大衆に訴えるが、遺憾ながら〈畜群〉にとってそれはあまりにも迂遠高邁な思想であり、誰ひとりとして聞くべき耳を持ち合わせていない。ツァラトゥストラは、自分と〈凡庸なる者〉との埋めがたい懸隔を悟って、その後は〈ふたたび大衆と語ろうとはせず〉、〈未聞のことに聞く耳をなお持っている者〉だけに向かって、〈わが歌を歌って聞かせる〉のである⁹⁾。一方、〈畜群と牧人と屍〉に対しては、ツァラトゥストラはことごとく自らの本性を包み隠す工面をする。大衆のもとに留まるために、自らの〈重い思想〉にヴェールを施し、〈軽やかな者〉として、〈絶対的要求者でなく、跳躍と横跳びを好む者〉として、振舞うことになる。ツァラトゥストラが〈深い知性〉を隠し持った、精神的に仮面をかぶった預言者の姿で登場している事実は、いずれにせよ、否定すべくもないだろう。

『人間的なあまりに人間的な』(1878—1880)の文中に、次のような一節がある。「仮面としての凡庸。――凡庸は、卓越した精神のつけうる最も好都合な仮面である。なぜなら、その仮面は大衆に、つまり凡庸な連中にそれが仮面であることを気付かせないからである――。しかも、卓越した精神がこの仮面をかぶるのは、まさにこのような連中のためなのだ。」¹⁰⁾ 〈高さの宿命〉を負った〈稀なる者〉としてのツァラトゥストラは、自ら偽装することによって〈凡庸な連中〉に怪しまれないための手管を講じている。それというのも、ツァラトゥストラは〈蜜を集めすぎた蜜蜂のごとく〉、豊饒な思想を懐胎していた。それは人間存在にかかわる根源的な思念であり、〈畜群〉や〈弱者〉にはとうてい受容するに耐えられない思想であった。すなわち、人間の生存にはもともと〈何の目標もなく〉、〈人間と大地のための意志は欠落している〉という極

悪の彼岸』、ならびに遺稿集『力への意志』においては、相当頻繁に用いられている。ただ遺憾なことに、それらはいずれも断片的な表現に終始しており、かつまた多彩な比喩の色に染まっていて、決して一義的ではない。それどころか、ニーチェの多くのアフォリズムがそうであるように、感性的な次元から形而上学的な次元までが縋い交ぜになって奥深いニュアンスにつつまこまれており、〈隠蔽の哲学〉は必ずしも容易には見えてこない。ただ、少なくともここでひとまず予想してよいことは、ニーチェにおけるこのような仮面性の局面が、単なる表現技法上の手段やニーチェ固有の〈芝居気〉の次元に留まるものではないということである。

さて、ニーチェが〈仮面〉や〈偽装〉などの言葉に託したそもそもの理念について、ないしは、ニーチェの思想の仮面性の背後にあるものについて、多少なりともその手がかりを得たいというのが、本論の主たる眼目である。ニーチェにとって、〈仮面〉の必然性はいったい奈辺にあるのか。ニーチェの自己隠蔽の情熱のうちには、どのような思念と、そしてまた、どのような弁証法が用意されているのか。もしかすると、それらの問題の所在のうちには、この詩人哲学者の抱いている思想の根幹と深くかかわりあっている部分があるのではないのか。

以上のような視点をもとにして、ニーチェにおける〈仮面〉の問題性について二、三の観点から検討してみたいと思う。ニーチェは〈仮面〉や〈偽装〉に関するコメントを繰り返し表明しているにもかかわらず、W. カウフマンが指摘するように、「ニーチェを解釈する側の殆んどの者は、この問題を無視してきた」⁴⁾ ふしがあるからである。

1. ツアラトウストラの偽装

ニーチェはもともと存在者のありようを、おそらくはダーウィンの進化論を援用しながら、〈高級種〉(die höhere Spezies) と〈低級種〉(die niedere Spezies) という二つの概念によって把握しようとした⁵⁾。しかるに、これに関してニーチェは、「存在者の階序が高くなるにつれて、〈偽装〉もまたより増大する」⁶⁾、と述べている。また別の箇所においても、「つねに偽装すること。人間は高級種になればなるほど、ますますお忍び (Inkognito) を必要とする」⁷⁾、と書いている。この高級種の属性は、〈深い精神〉を擁する、いわゆる〈稀なる者〉、〈強者〉である。すなわち、〈神は死んだ〉という〈あまりにも確実な不幸な知識〉に通暁している者、そしてそれがゆえに深く苦悩する者、〈犠牲者と言ってしかるべき者〉である。(ちなみにニーチェは、「どれほど深く苦

ニーチェにおける仮面の思想

恒 吉 良 隆

ニーチェほど自分について多くを語った者は珍しい。しかしまた、ニーチェほど究極のところまで自分を覆い隠した者もまれである。多くの場合は問題を一般化することによって、あるいは、ソクラテスやワグナーをはじめとする諸人物に事寄せながら、ニーチェはそれらの対象を語る以上に、何より自分自身を語った。自分を伏せることによって、自分を語った。ところが、多様なその種の自己告白を通じて、逆にニーチェは、まれにみる自己隠匿をなしとげている。オイゲン・フィンクはその著『ニーチェの哲学』（1960）のなかで、次のように述べている。「ニーチェにあっては、自己の本質を隠すことが情熱と化している。ニーチェは、ある無気味な流儀で、仮面や仮装や道化を愛する。幾多の〈人物像〉において、彼は自分を表わしもするが、同様にまた隠しもする。ニーチェほどソフィスト的なやり方で自分の哲学活動を覆い隠した哲学者は、おそらくかつていなかったと言ってよいだろう。」¹⁾

フィンクの指摘を俟つまでもなく、実のところニーチェ自身が次のように口にしてしている。「自分を隠す一切の者たちのうちで、わたしは最も深く自分を隠す者である。」(Ich bin der Versteckteste aller Versteckten.) —— 自己隠蔽の事実を隠し立てしようとしないうち、この〈ひとりの偉大な韜晦者〉ニーチェにあっては、どうやら自己表出の饒舌さそれじたいが、すでに自己韜晦の有効な手立てになっているきらいがある。なぜなら、これまたニーチェが自ら釈明するように、「自己について多くを語ることは、自己を隠すための、ひとつの手段でもあり得る」²⁾ からである。総じて、ニーチェの著述活動やその表現技法のうちには、独自の心理学が潜んでいる。そしてその心理学のうちには、「ニーチェの哲学は潜在している。それは彼の著作において公開されているというよりも、むしろ隠蔽されている。(中略) それはニーチェの仮面によって、また彼が演じる多様な人物や役割によって、偽装されている。」³⁾ (フィンク)

そう言えば、ニーチェの著述には、仮面 (Maske)、偽装 (Verkleidung, Verstellung)、芝居気 (Schauspielerei) などの言葉や、またそれに類する表現が好んで用いられている。特に、中期の作品『華やぐ智慧』や後期の作品『善